

居住福祉ブックレット『子どもの道くさ』14年を経て復刊

会員の水月昭道さん（人間環境学、立命館大客員教授）の居住福祉ブックレット7『子どもの道くさ』（東信堂）が最近注目を集めて、14年ぶりの2020年8月に復刊した。毎日新聞10月6日付の記事「くらしナビ・ライフスタイル『子どもの道草』研究本、14年経て光」（生野由佳記者）で取り上げられた。

ツイッターで評判広がる

記事によると、今年7月、ある男性が『子どもの道くさ』の中古本を偶然手に取り、「子どもはちゃんと帰らなくてもよい」という感想を道草中の子どもの写真付きでツイートしたところ、このツイートが拡散され、反響が広がり、リツイートが約2万5千、「いいね」が12万を超え、初版700円+税、88頁の中古本価格が10万円以上になったとか。

水月さんは記事の中で「コロナ禍の影響で、外出自粛、リモートワークが求められ、窮屈な生活に心身ともに疲労している人が多い。そこで通常ならば役に立たないようなものの価値に気づくケースがあるかもしれない」と分析している。

『子どもの道くさ』には何が書かれているのか。発行日は2006年5月30日。2005年12月1日に栃木県で起こった小学1年生の女兒が殺害された事件の半年後。こうした状況から、水月さんは、子どもの安全に偏った議論が優先され、どんなよい環境を提供すべきなのかという全体的視点が省みられなくなったとみる。各論は念入りに調査し緻密な分析をするが、全体構想を飛ばしていきなり各論に入るような話である。例えば、スクールバスは子どもの安全を確保するが、生活圏が学校と自宅に限定された場所に閉じ込められるなどである。

道草は子どもの好奇心や探究心を引き出す

道草は無用のようになぜ、扱われるのか。水月さんの見方は、20世紀の価値観は効率追求型で合理的なものに価値があり、ムダは不合理と考えがちだったから。そこで、子どもにとって健全なる道草を可能とし、それを許す地域社会の環境があるかを考える視点を持つべきだというわけである。古老からの聞き取りで、道草の間に道端の牛車に飛び乗り御者に怒られた、鍛冶屋さん、時計屋さん、ハンコ屋さんら職人の仕事を注視した体験が語られた。そうした体験は、子どもの好奇心や探究心を引き出す環境として効用があり、水月さんの研究は、子どもたちが道草の中でいかに豊かな遊びや体験をしているかという効用に視点を置いたものである。

都市化の中で、自然環境や空き地が激減し、道路は車で危険になり、子どもたちはおけいこ事や塾に時間をとられる。いわば、時間・空間・仲間の「三間」の喪失である。安全性への過敏な反応には排他性や攻撃性が潜む。学校には、指定通学路というルールがあるが、そこを通るのは雨の日だけ。子どもたちはそれを無視して、抜け道や遠回りをする。

安心・安全より楽しい、面白いといった他のことを優先する。その行動は、狭い路地を探検、かばん持ち、道端のブロックで落とし合い、植木の果物を採って食べる、崖登りといった具合で多種多様、変幻自在である。

「おまじない」にも作法やルール

水月さんは、福岡市近郊の児童数 120 人の小学校で観察し、その行動を反応型、注目型、発見型など 9 タイプに分類した。そこで見えたのは、子どもと環境との相互交流、道くさの過程にみせる知恵や工夫であった。ただの小石が、石けりの遊び道具としてリ・デザインされる。ある時、一斉に空の方を見上げて手を合わせて拝み始めた。飛行機を百回キャッチすると「いいこと」があるという「おまじない」である。飛行場が近い小学校ならではの遊びだ。作法やルールもあり、へりをキャッチするとゼロに戻る。百回成功すると親に報告して、すきなものを買ってもらえるという。また、秘密の抜け道は狭く、子どもの体の大きさと関係する「子ども道」である。

昔の親は「お化けが出る」「バチが当たる」と脅したが、いまは通用しない。今は「約束事」に効果を見出している。危険に巻き込まれるような行動はとらないという約束である。遊びを教えるプレイリーダーのような人を使う「通学随員制度」を提唱する。大事なものは、行動を規制するのではなく、興味ある場所を大人が知って子どもの行動を気にかける、理解と信頼の関係を築くことと提言している。(副会長：神野 武美)